

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭 故財部教授遺影署名及原稿

### 論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助  
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

### 時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……………文學博士 矢野仁一

### 研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行  
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

### 記事

財部教授逝く  
故財部教授年譜及著書論文目錄

### 追憶文

神戸 正雄 本庄榮治郎 蜷川 虎三  
木村喜一郎 吳文炳 宗藤 圭三  
青盛 和雄 松岡孝兒 石川 興二  
黒正 巖 藤本幸太郎 谷口 吉彦  
岡崎 文規

### 附錄

### 彙報

外國雜誌論題

## 財部先生

木村喜一郎

先生は古事記を擧げたり、本草學を引張り出されたりするものであるから僻易して初めは舊弊を頑固な方のやうに見受けたのであるが、指導を辱ふするに及んで、必ずしも然る譯で無いことを知るやうになつた。

又人糞尿の研究や漬物觀が飛び出すから、世間では如何にも畸人なるが如く言ひ觸らされて居るけれども、考方に極めてバランスのとれた常識人であつたことは意外としたのであつた。先生は畢竟名利の巷に東奔西走する人でなく、葛藤を外に自ら會得して楽しむ底の入として終始せられたものゝやうに思ふ。

先生の研究は人も知る如く多方面に互つて居つた。統計學と云ふ學問の性質から自ら左様になつたものであらう。早くから經營統計なる分野の開拓に着眼せられて居つたことは私の忘れることの出来ないところである。今日のやうに企業經營についての學問的關心が抱かれて居らなかつた時分(大正十二年)私經營統計概論なる論文があり、このうちに經營統計の要領が盡くされて仕舞つて居るかに見へるのである。當時は何とも思はなかつたが、引用せられた文献は一粒選りの觀がすることを今日評價し得るやうに私はなつた。専門家ならざる先生が、經營學者ニックリッシュ教授の著書を見出され尊重して居られる様子が充分窺はれるが

獨逸に於ける教授の聲望を見聞するにつけ、先生の鑑識眼に敬意を表せざるを得なく思ふ。「統計上に於ける新方面としての私經營統計は何處にても急激に發達すべしと豫測するも殆んど誤まることなかるべし」とあり、一つやつて見やうと進んで行くうち、經營學の領域で足踏みして仕舞ひ、統計研究にまで這入らないで居ることは、心中申譯なく感じて居る次第である。

だから何時も思ふのである。あんなに確しかなものを握つて居られるのに何故もつと讀み易い口語體で表はされないのか。合點が行かないのである。尤も先生自身も御役所が既に口語體を取つて居る折柄、相變はらずの文章體でもあるまいと其の迂愚を述べて居られるけれども、内心は多分の自信を持つて居られたらしく思はれる。私は「當今は書き手許りで讀み手はあらやせん」と一再ならず先生が云ふて居られたのを覚えて居る。然し其の餘韻に富む表現には定評があつた。先生の講義を聞いたほどの者は誰れでもどこかの一言半句を忘れないで其の儘再現出来るほど印象的なもの

であつた。然し先生の固執せられた文章體はどれだけ先生の研究の普及を妨げたか知れぬと思ふ。無理の出来ることを是れまで舊い草に新らしき酒を盛ると云ふ諺で示されることになつて居るが、先生にあつては或は左様でなかつたのかも知れない。蘆屋名馬を繋ぐと云ふのが茶人の風儀であると云はれるが、これと行き方を同じくして新しい内容を舊い形式に盛らうとするところに矜持を抱いて居られたのかも知れんとも思ふ。

こう云ふところは先生の日常生活のうちに思ひあたるところが多い。と云つても私は酒中の趣を解さないから先生の興を妨げては相濟まんと努めて避けなければ、尙御伴に預つたことが少くない。先生の *weiter* *gehen* は餘りにも有名である。食通と云つたことは何う云ふ事を指すものか知らんけれども、具合よくお腹に収まる飲み方食べ方であつた。いんちきとか、いかさまと云つたことは凡そ縁の遠い筋の通つたところであつた。梯のステツプはしつかりして居つた。そして

淡泊なものやあぶら濃いもの、硬いもの軟かいもの、魚肉野菜など成る可く夫々の本領が發揮せられたまゝのもの、極めて巧妙に配合せられるのであつた。

美味求真と云はれるが、私は先生の *weiter sein* のうちに得るところがあつたやうに思ふ。大ものを捉へてこれがエツセンスを掴まへると云ふことを身を以て教示せられたやうな氣がしてならない。畢竟、先生は叩けよ、されば開かれんと云つた類の方であつたやうに思ふ。私もゼミナールとやらを擔當し人の子にもを教へる身分となつて、考へさせられることが随分多くなつたが、もつと先生の門を叩いて置けばよかつたのにと残念に堪へない。御停年退職は間もないことは聞いては居つたが、永く其の風格に接することが出来なくなつて悼ましい限りである。